

# 桜井 哲夫（さくらい・てつお）

## 1、プロフィール

詩人。「栗生詩話会」。詩集『津軽の子守唄』、詩・写真集『津軽の音が聞こえる』。NHK 総合テレビ『にんげんどキュメント／津軽、故郷の光の中へ』で人生と帰郷を追う。

<生没>

1924(大正 13)年7月 10 日～2011(平成 24)年 12 月 28 日

<代表作>

詩集『津軽の子守唄』・『ぎんよう』・『無窮花抄』・『タイの蝶々』・『鵲の家』・『桜井哲夫詩集』・『鶴田橋賛歌』

詩写真集『津軽の歌が聞こえる』

散文集『盲目の王将物語』

<青森との関わり>

鶴田町に生まれる。ハンセン病の元患者で盲目の詩人。故郷を題材にした作品を執筆。

## 2、作家解説

桜井哲夫(本名:長峰利造)は、大正 13 年7月 10 日に北津軽郡鶴田町妙堂崎で生まれる。長峰家の七男だった。昭和6年4月に水元村立水元尋常小学校妙堂崎分教場に入学。13歳の時にハンセン病が発病する。昭和 14 年3月に高等科卒業。弘前市で 10 ヶ月ほど療養生活を送るも回復せず、桜井哲夫と改名し、「らい予防法」によって昭和 16 年 10 月に群馬県草津町にあった国立療養所栗生楽泉園に入所。

軽症だったので、農作業や重病患者の看護等、苛酷な労働に明け暮れた。持参した金で日本文学全集を購入。22歳の時に園内で知り合った真佐子と結婚。26歳の時に妻が子供を宿すが、らい患者にとって厳しい状況だったために人工掻

爬。29歳の時に、妻が白血病で他界(享年26歳)。翌年に失明し、声帯と指も失う。失明後に入会した栗生盲人会で盲人将棋に熱意を傾ける。昭和58年に園長の小林茂信氏の勧めで栗生詩話会に入会。村松武氏等から詩を学ぶ。昭和60年にカトリックの洗礼を受ける。

昭和63年11月15日に詩集『津軽の子守唄』(編集工房ノア)、平成3年1月10日に『ぎんよう』(青磁社)、平成6年5月31日に『無窮花抄』(土曜美術社出版販売)、平成8年8月20日に散文集『盲目の王将物語』(土曜美術社出版販売)、平成12年4月20日に詩集『タイの蝶々』(土曜美術社出版販売)、平成14年1月30日に『鵲の家』(土曜美術社出版販売)、平成15年1月20日に『新・日本現代詩文庫12 桜井哲夫詩集』(土曜美術社出版販売)、平成16年5月22日に詩・写真(鏑山英次)集『津軽の音が聞こえる』(ウインズ出版)を出版。翌年に『The Call of Tsugaru』(ウインズ出版)と英訳して出版。本名で平成20年3月10日に詩集『鶴田橋賛歌』(津軽書房)を出版。

平成14年2月14日にNHK総合テレビで桜井哲夫の人生と60年ぶりの帰郷を追った「にんげんどキュメント／津軽、故郷の光の中へ」に出演。平成19年2月14日にバチカン宮殿で、ローマ法王に謁見。

平成23年12月28日、肺炎のため栗生楽泉園で87歳で死去。故郷に納骨。

### 3、資料紹介

#### ○『津軽の子守唄』

図書

1988(昭和63)年11月15日

190 mm × 130 mm

「老人は古里津軽の子守唄を歌った／療養所夫婦の間に生まれ／標本室の棚で泣くわが子の声を木枯らしの中で聞いた／二十六歳でその子の母は死んでしまった」と、苛酷な人生と対峙しながら、望郷の思いがあふれている。